

カー『バクーニン』論

マックス・ネットラウ

今号から三回に分けて訳出する論文は、E・H・カー『バクーニン』についてマックス・ネットラウが執筆した書評である。スペースの都合で解題と凡例は次回にまわすが、この書評については今井順子「カーの『バクーニン』像をめぐる」(「アナキ」一二号所収)を参照されたい。全体はI、II、IIIから成り、四百字訳稿で約五五枚であるが、今回はI、量からすると全体の約半分である。



I

イギリスにおけるバクーニンの生涯についてのこれまでの刊行物は『ザ・コスモポリタン・レビュー』誌、一八六二年二月一日号、『ザ・ワーキング・マン』誌、一八六二年三月号、およびトチャッティの『リバティ』誌、一八九六年六月号に翻訳されている『コロコル』誌のアレクサンドル・ゲルツェンによる記事、そして『ジ・ア

ナキスト』(ロンドン)、一八六一年一月一日号のハーヴェイ・セイモアによる「ミハイル・バクーニン」「リバティ」誌、ボストン、一八八一年一月二六日号をベースとした)であって、後者は八ページのパンフレットの形で一八八八年に公刊された。個人主義的アナキストであるアンブロズ・カストン・カドンとともに「ザ・ワーキング・マン」誌の委員会は一八六二年一月一日にバクーニンを歓迎した。後者は一八六二年にブラッドラーフその他、一八六九年にインタナショナルの会計主任であるコーウェル・ステプニー、また一八六一年にアメリカの東部諸州で数週間を過ごしたときに、上院議員のチャールズ・サムナーのような何人かのアメリカ人とも、わずかに面識があった。協同新聞はパリの『デモクラシー』誌へのバクーニンの手紙からの抜粋を発表した(一八六八年)。B・R・タッカー(ボストン)はバクーニンの『神と国家』を翻訳し(一八八三年)、H・セイモアはこのテキストにイギリス版のカバーをつけて流布した(タンブリッジ・ウェルズ、一八八三年)。筆者はトーマス・カントウェルによるタッカー訳のリブリントへの附録においてそのオリジンもしくはこの記念すべき断章を最初に説明した(一八九四年の『ザ・コモンウィール』誌版)。彼はタッカー訳の一九一〇年の『フ

リダム』誌版において原稿からオリジナル・テキストを修復もした。このテキストは数年後に『マザー・アース』誌(ニューヨーク)によってリプリントされた、と私は推定している。他のテキストはボストン本の再刊である。奇妙なことを指摘すると、「バクーニン・プレス」と自称する出版社はこの著書のいわゆる「わずかに省略された」版本を刊行することを適当と考えた(グラスゴー、一九二〇年)。「マッチャーニの政治神学」のタッカー訳は八〇年代に「リバティ」誌に発表され、他方で『神と国家』の続稿からの未刊の抜萃はタッカーの『リバティ』誌に一八九四―九五五年に私自身が発表した。クロボトキン(一九一四年)その他による折にふれての諸論文、『フリーダム』誌がトーマス・キールによって編集されていたときに発表された一八五一年のいわゆる「告白」のテーマについての私自身によるいくつかの議論を別にすると、以上がバクーニンの生涯や思想についてイギリスの読者が入手しうるもののはずすべである。

これをバクーニンの長年にわたる大活動、多くの著述、利用できるほり大な証拠や歴史的な研究と比較するとき、わめてとぼしい。この真にインタナショナルなテーマはロシア語、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、チェク語、スエーデン語、イタリア語、スペイン語、ある特

殊な場合には、ルーマニア語やブルガリア語といった他の数カ国語の刊行物に精通していることを要求する。だから、E・H・カーによる「ミハイル・バクーニン」、(原書で)全五〇一ページはイギリスの読書にとっては本当に目新しいものであり、ほり大な材料のエッセンスを取り入れる骨組を準備する縮尺のついた著書である。けれども、私が明らかにしようと試みるであろうように、本書は極端に期待をうらぎるものである。

カー氏はロシア語のものについてはきわめて篤学な知識をもっているが、他の言葉も刊行物もおしなべて彼に近ずきたい。彼の(原書で)全四八八ページの本文はコルニロフ、ボロンスキーその他によって明らかにされた初期のロシア語の資料、近年ニコラエフスキーが研究したような一八四八―四九年の資料、一八九四年以来おびただしく提出され、検討されている社会主義者やインタナショナルリストの資料、一八六一年に日本からサンフランシスコへ渡る間にバクーニンが言ったことのいくつかを現実に再生しているコーの日記(三二―一二ページ)のようなカー自身による若干の発見物の感嘆すべき学術的なレジメを含んでいるであろう。けれども、本書はこうした最少限度の必要事にまで到達しているであろうか。

本書には序文がないので、私は原稿と印刷された資料についてのカー氏の説明に目を向けた。カー氏は私とコミュニケーションがあり、質問すべてに回答を得ており、個人的に私に会いに来たこともあったのであるから、たやすく回避できたであろうはなはだしい誤説からその説明ははじまっている。

「バクーニンの原稿の最大のコレクションはウィーンのネットラウ博士によってなされたもので、それは最近アムステルダム国際社会史研究所の所有するところとなった」(六六五ページ)。もし本書の版が重ねられるならば、この叙述が訂正されると期待するのはいいことであろうか。アムステルダムの研究所は、私によって「収集され」たのではなく、私によって委託されて保有するこうした原稿とは全く無関係である。「それ(コレクション)はまだ分類されておらず」(六六五ページ)と彼はつづけるが、これらの原稿のどのページ、どの断片も切り抜きも私のバクーニン伝(一八九八—一九〇〇年)のしかるべき場所で記述されており、この記述はまちがいに分類にひとしい研究と配置にもとづいている。

「彼の死後バクーニンが残した私的な性質の原稿」(六六六ページ)についてカー氏は「それらはどれも印刷されず、保存されているかどうか不明である」(六六

六ページ)と述べている。ここで彼は誤りをおかしている。というのもまさしくこれらの文書はおびただしく私に示されたことがあり、私は伝記の原稿のままの補遺(一九〇三—五年)においてそれらをすべて利用し、少なからずを再録したからである。私はこの補遺をジェームズ・ギョームの随意処理としたが、彼はそれからいくらかの量の資料、抜萃、その他を取り出し、それらを彼の全四巻の『インタナショナル』(一九〇五—一〇年)のなかへ取り入れた。もちろん、同書はカー氏の著書の主要なソースである。彼はこうした事実を完全にまちがった言葉で述べている(六七〇ページ)。「これらの巻はまた、ネットラウ博士のコレクション中の未刊のバクーニンの原稿からの引用を含んでいる」。そうではない、このところはまちがっている。彼(バクーニン)の妻の所有するところとなったこれらの「資料からの引用」は、「カー氏はそれらの資料について「そしてそれらが保存されているかどうか不明である」と述べた」、カー氏は六六六ページでそのような文書が保存されているかどうか無視しているというのに、六七〇ページで述べているように、「ネットラウ博士のコレクションのなかの」原稿からは明らかに取り出すことはできないのだ。彼はつづけて、ギョームが自著(一九〇五—一〇年)

のために「彼自身の所有で、その後彼が廃棄した原稿」を利用した、と述べている(六七〇ページ)。彼はバクーニンのどの原稿をも「その後」に「廃棄しよう」とは夢想せず、それらをフランスの公共図書館に収蔵したかったのであって、私はそのことが運ばれるのを支援したことがある。ここでカー氏の破棄についての記述は、六三二ページで言及されている一八七四年にバクーニンが執筆したある私的なドキュメント、「回想」を一八八八年にギョームが破棄した、という事実の漠然とした誤った記憶であり、ギョームはこの事実を十分正確に発表していた。

こうしたいくつかの実例で観察した後、局外者は精通してはいないがそれでも容易に接近しやすい事実にもっと注意し、それほどでもなく実証的であるならば正確に叙述できたであろう皆さんの記述の実例をべつとした後に、それでは、この大著のなかで述べられているあれほど多くのヨリ知られていない、もしくは議論の余地ある諸事実に、私はいかにして信をおくことができようか。たしかに、その私的な文書や公的な文書が、バクーニンに関するそれらが九〇年代から今日までそうであり、この仕事は今なおつづいている以上に、あけすけかつ公然と出される公人としての人間は多くはない。このテーマ

について(原書で)五〇〇ページを刊行する著者が、実際の人間とその思想に目をくれていると私たちが期待しうるものについてのあれほどの豊かな基盤である原稿や手紙の問題に関して、ヨリよく知っていると期待することはありうることである。

けれども、本書には公正な審理を下そう。私は第二章の「フィレンツェ」(一八六四年)から読みはじめた。というのは、これとそれにつづく部分が、二冊のイタリア語の著書、つまりネロ・ロッセルリ博士(反ファシスト、フランスで殺害された)による『マッティーニとバクーニン』(トクリン、一九二七年、全八プラス四四四ページ、および、一九二六年九月から一月にかけて執筆され、マラテスタの長文の序文のついた私自身の「一八六七年から一八七二年のイタリアにおけるバクーニンとインタナショナル」(ジュネーヴ、イル・リスヴェグリオ、一九二八年、全三一プラス三九七ページ)——そしてジェームズ・ギョームによる『インタナショナル：』(パリ、一九〇五—一九一〇年、ぎっしりつめて印刷された全五九プラス一、三二三ページ)によって西欧の読者に最もとつきやすいからである。明らかにあまりにも長文なのでここで詳細にわたって提示することができない重大かつ多数の証拠と相いれないのだから、私はカー氏

の諸章で私の目をひきつける二、三箇所にも注目する。

彼は次のように述べる（四一一ページ）。「バクーニンはイタリアへ、イタリア・ナショナリズムの熱烈な使徒として来た」。もっとくわしい研究の示すところでは、バクーニンはボーランド経験以後ちょうどその頃はどんなナショナリズムにも全くうんざりしていたのである。ガリバルジは、一時はバクーニンがスラヴ解放を目的とすることを夢みていたかもしれないものとして、彼には役に立つ一つの革命の力であった。マッチャーニはナショナリストの政治家であって、バクーニンは彼とはけっしてうちとけれなかった。

バクーニンは一度だって「人民王政という考えをもてあそん」（四一一ページ）だことがあったであろうか。彼は王政が人民的になるために行動しうることを示そうと本当に望んだことがあった、と説明したことはある。バクーニンにはずっと未知の人であった偶然の訪問者、あるいは、バクーニンに魅了されたと感じた若ものたち、あまりにも劣弱なのでバクーニンのレベルや路線で考えたり活動したりできず、かくして遠ざかったり他の大立者に従ったりする若ものたち——ゲー、メルチニコフ、モデストフ、ド・グベルナチス、ヴィリューボフ、その他すべて——の言葉によってバクーニンの環境を再構成

しようとすることは安っぽい業績である。

本書でバクーニンはいつも誤っている。「フリーメイソンの秘密性と儀式はバクーニンにとってその魅力を保持していた」（四一五ページ）、そして彼は組織に対する支配に拘泥するとかで責められている。しかし、まさにド・グベルナチスやヴィリューボフの言葉から本当に彼のグループの環境がいかに儀式ばることなく打ちつけていたかを知るとき、同盟の部会のためにジュネーヴの労働者を加入させる「彼のおどろくほどいいかげんな方法」（という表現は）は批判にさらされよう（四七三ページ）。

バクーニンの秘密結社が一八六四年二月と六月もしくは七月の間にフィレンツェで創立されたことは疑いないが、カー氏は次のように言う（四二二ページ）。「ここで（パリで：MN）（手許にある記録のかぎりでは）初めて、彼は秘密の革命的な『同胞団』の結成に乗りだした」。「このステップがどの程度マルクスとの会談（ロンドンにおける：MN）に刺激されたものか、あるいは新しく創立されたインタナショナルを援助する気持でなされたものかは、推測の域を出るわけにはゆかない」。このような叙述はそれに有利な一片の証拠もなしに既存の事実を不当にくつがえすものである、と私はみなす。

エリゼ・ルクリュはあの時代の結社への彼と他のものの加入について私に話してくれたし、まさしくこれが新しい団体のはじまり、最初のステップであったということに問題はない。パリへ来る以前、彼がロンドンでアルフレッド・タランディアーその他をたしかに加入させていた。バクーニン自身のその後の叙述はあてにならない、とどうして断言できるのであろうか。彼は一八七三年にはロシア語の書物でこうした事実をすぐれて明らかに説明しているのであり、一八六六年にゲルツェンへ手紙で書いたことはこの説明と符合する。任意のグループの浮沈はあったにしても、あるものは意見の相違で離れ、他のものは加盟し、他方では少数のものは堅固な不断の中心核を形成していたという連続性は一八六四年以来ずっとあったのである。実のところ、この集団は一八七一年からこの環境と関係していたマラテスタの一九三二年の死とともに終結した。カー氏がときどき次のように書く（四二五ページ）とき、非常に批判的である。「フィレンツェの同胞たちの何人かがその後彼（バクーニン：MN）のこしらえた結社に加わったということは考えられることである——特にありそうだというわけではないけれども」。金細工人のベルティ・カルラと弁護士ブラ

にせよ、バクーニンと接触しつづけていたと考える動かしがたい理由がある。

「彼の筆である現存の自伝の断片（それはこのとき書かれたものかもしれない、そうでないかもしれない）（ソレントで、一八六五年、四二七—八ページ）この一文はカー氏が私の伝記の最初の注さえも読まなかったことを示しているが、その注では、一八六八年に行なわれた演説がこの原稿のなかで指摘されている、ということが述べられている。だから、それは一八六五年には書かれなかったかもしれないのである。また「（政治の世界から）きれいに身をひいて一五年過ぎた」（四二八ページ）ヘルヴェークは、つい数年前にはラッサールと少なからずつきあいがあったのだから、一八六五年に全く消え去ったのではない。

一八六六年の『ラ・シトリアツィオン』誌その他のイタリア語の刊行物、結社「リベルタ・エ・ジウスチア」やその機関紙については一語もない。フィレンツェとナポリについての全三二ページは、最初はビザカーネの思想や教示によって追求されたイタリアのアナキスト社会主義の基盤がこの時代にきずかれたのであるから、あれこれのイタリアの諸活動を記述するためにはこの一〇倍以上も割かれてしかるべきである。つまらない二章だ、

以上も割かれてしかるべきである。つまらない二章だ、

バクーニンは弟たちの一人、パウロとその妻ナタリヤ・コルスコフと最後の会見をしたが、初期の家族の記録が保存されているのは彼らのおかげである。彼らが親しい間柄として会い、別れたことはよく知られている（一八六五年）。カー氏は「もちろんミハイルは家族の財産の分け前を彼の弟たちに与るさくせがみつづけていた」（四二七ページ）と述べている。だから、三〇年以上にわたって彼になされた不当な振舞を思い出すことは裕福な家族に「うるさくせがむ」ことを意味した。これについてはもっと多くのことが付随するであろう。

本書のような大著においては、著者がさまざまな環境すべてについてかなり理解しており、少なくともいちぢるしい不一致を避けるものだと予想される。「大物でない方の同時代人たち」は、全くそれはそれなりにあるがまま歴史家になじむようになっていくし、彼らがちがったぐあいに提示されているのは奇妙なものである。ここではこうして、雇われ職人の洋服屋である老レスナーは、バクーニンが「彼の衣裳箆を補充しに」行った「洋服屋」（四一九ページ）として出てくる。また、労働すること以外なんでもやるとして知られていたアルペール・リジャール（祖父は労働者であった）は「アルペール・リジャール」という名前のリヨンから来た労働者」（四六

七ページ）と記され——ジュネーヴの田舎の労働者と市民の典型であるペロンは「フランス人のシャルル・ペロン」（四七二ページ）となる。このテーマに精通しているものは誰でも絶対にそのような過失を犯すことはできないし、ブルスキ（パルスキ）、カポローソ（カポルソ）、アルヌール（アアルヌール）と書きはしないであろう。「バクーニンのあらゆる骨折りにもかかわらず、同盟のジュネーヴ・グループは彼自身（バクーニン）と少数の彼の知己以外のなにもからも成っていなかった」（四七三ページ）。一八九八年の私の伝記において、七九人、二二人、五人、トータルで一〇六人（そのうち約二〇人がイタリア人とスペイン人で海外に居住していた）の名前があげられているとき、こうしたみくびつたような叙述を何故にするのであろうか。これは約八六人の地方のメンバーを取りあげていないのであり、一八六九一七〇年におけるこれらの多くの特別の活動は、私が議事録から抜萃した彼らの会合の再現によって見ることができる。四八八ページでは、一八六九年夏の一〇四人というメンバーの数が正しく指摘されている。

四七四ページのペロンの説明は、同書にある敵対的なレジメよりも、ギョームあての後の手紙に記録されているような彼自身の言葉でもってヨリ好都合な側面を採用

している。もしも公然の同盟のバリ部会について「それが存在したという単なる事実以外になにも記録されていない」（四七五ページ）ならば、ベドッジュ、オゼローフその他についてのことすべては著者に知られなかったにちがいない。もしトッツイがナポリ時代から「おそらく」（四七九ページ）残存していたならば、トッツイのバクーニンとの初期の関係について記録されていることはすべて同様にカー氏には知られていない。高官にして政治家であるものの息子、ギョームがヌジャテル、チュエーリッヒの多くの興味深い人々と会い、インタナショナルの二度のスイスでの会議を見る特別の機会を若いころから本當にもっていたのであるから、一八六九年にジェームズ・ギョームが「世界についても、自分の種族ではない人々についてもほとんど知らなかった」（四八一ページ）とは誰も夢にさえ思わないであろう。しかし、実のところ、カー氏は「故郷のル・ロークルの町」（四八二ページ）について語っているが珍妙な記述である。というのは、ギョームはロンドン（一八四四年）、クラークンのノザンプトン・スクエアで、またはその近くでたまたま誕生しているのであるからである。

ドイツの社会民主主義者、ヴェルトハイムは、ライプチヒのリープクネヒトがバクーニンに対する中傷的な侮

言を公言しているのを聞いたことがある、とジュネーヴで報告した（一八六九年）。このことは次のような言葉で語られねばならないのか。「ヴェルトハイムと名乗るドイツ系のユダヤ人が：：情報をもつてジュネーヴに現われた」（四九七ページ）。ごく初期のドイツの社会主義者の一人、ヘスが問題になっているときに、彼は「モーゼス・ヘスとかいう男」（五〇〇ページ）と呼ばれねばならないのか。バクーニンがロシアのスパイと侮辱され、ほのめかされていることを憤っているとき、次のようであらねばならないのか。「激した想像力はこの点に病的なほど過敏である」（四九七ページ）、そして、「彼が老年の域に達したいま」「被害妄想の相」（五〇〇ページ）を帯びる、と。このような状況において名誉ある人々が、名誉の法廷に訴えるとき、本當にこのことは、「一九世紀の革命家の間ですこぶる流行の仕掛け」（言葉はさらにつづく）（四九七ページ）訴えるとして冷笑的に記されねばならないような怪しげな行動であろうか。そして、バクーニンが上機嫌で文書の判決を手にしてタバコに火をつけたとき、次のようなおざなりな用語でこのことを語らねばならないのか。「このメロドラマチックな寛大ぶった姿勢は、一〇人前後の公平な裁判官たちがこの奇態に消えていった争いについて本當にどう考え

ていたかを後の世のひとびとが知る機会を奪った」(四九八ページ)。この争いにおいて、リープクネヒトは降参し、数カ月後にロシアの革命運動についてのリープクネヒトあてのバクーニンの手紙がリープクネヒトの新聞、『フォルクスシュタート』誌(一八七〇年四月八日号)のために執筆される、というような誠実の保証を提供しているようにバクーニンには思われた、というのである。

一八六四―六九年(四一一―五〇八ページ)についての多くの所見のなからこうした数少ないものによって私が感ずるのは、本書はバクーニンについての卓抜な学問的な著書ではなく、マルクスからステクロフにいたる敵意ある著者たちがバクーニンについて言ったことの焼きなおしにすぎないということであり、社会主義者を氣質にあわないデマゴグ、べらべらまくしたてる民主主義者、長髪の若者として記述するために採用された、冷笑的な悪意あるスタイルで、あの高慢な、典型的にジャーナリスティックなジャーゴンでたいがい言い直されているということである。ウィリアム・モリスの時代の社会主義者はあのように描かれており、『デイリー・メール』誌はもちろんこの時代に名譽ある伝統を育成している。そのうえ、バクーニンはお金を借りていた――「行きあたりばったりの借金、そして不分明な金策」(五〇

五ページ)――「彼のズボン最後のボタンまでなくなつた」(ゲルツェン、四五五ページ)――どんな機会にでもくどくど言われるにちがいないことすべて――これは何のためなのか。その思想と行動を十分に記述するためには何冊もの著書を必要とする人々を絶えず冷笑することは慣行なのか。貧しいイギリスの侍女、もしくはおそらく由緒のない家系の婦人、「年輩のミス・リーヴ」(四二八ページ)、老家庭教師がバクーニン夫人の腕のなかで死に、バクーニンが感動的な追憶の一文を書いたときでさえ、カー氏は次のように言わざるをえないと考えている。「中年のバクーニンはなお、貧しくて彼に物質的な援助を与えることができず、内気なため彼の政治的理想に共鳴できないひとびとにさえ、これほどの直情でこどものような情熱を捧げることができた」(四二九ページ)。バクーニンはエミリー・リーヴ嬢について実際にこう書いたことがあった、「これほど気持のよい、知的で心の優しい人間に、私はめったに会わなかった」(四二九ページ)。だから、これがこどものようであり、彼女は彼にお金を与えることも政治において彼の味方になることもできなかったけれども、なぜカー氏はそう言ったのであろうか。このことは本書にしみ込んでいるつまらない憎悪精神という意見を構成するのにもってこい

であるのかもしれない。

こうして今まで、ギョームがあれほど懸命に正確な形で確定しようと努力したように、他のものはカー氏によって――直接的、もしくはステクロフ氏の伝記(六七―ページ)で彼自身が述べているように、「しばしば同情と理解に欠けている」を絶えず使用することによって――きわめて不完全かつずさんな方法で焼き直されている、ということだけを見てきた。ときに彼は否定的な叙述なしは批判的な疑問を一掃するのに貢献しているが、これらは、すでに論じたいいくつかの実例が明らかにしているように、必らずしもヨリすぐれた知識にもとずいてはいない。

私は同じような方法で本書の他の部分を論じ、新しい資料が使用されているところを指摘するつもりである。フィレンツェからバーゼル会議までの諸章は新しい成果を欠いており、がっかりする。

(つづく)

(坂入純二訳)

野 火

清水修一君から

お元氣のことと思います、5月30日に上告の棄却の判

決が最高裁からありました(算入50日)。6月の10日すぎころに下獄ということになります。通算は全部で10ヶ月と20日ですので、78年の7月ころ出獄の予定です。
お元氣で、私も元氣にやります(5月31日)
いやでもおうでも落付かねばならない。できるだけ勉強して、この長い期間に自分の内容を豊かにして欲しい。語学も何か一つだけでもモノにしてくれ。時のたつのは早いものだ。苦しいだろうが頑張って生き抜いてくれ。皆で君を待っている。(三浦)

岩佐作太郎遺稿集刊行会月報・第一号

岩佐作太郎研究会が企画されている。明治社会主義の潮流、さらにさかのぼって安藤昌益におよぶ日本の社会思想史的観点、ヨーロッパのアナーキズム、サンシカリズムの研究。こうした意欲的な研究に根ざして岩佐老への理解を深めようというのだ。

○日時、毎月第2・4木曜午後6時から

○場所、水道橋喫茶店「終着駅」

×

尾関弘君

六月22日(火)夜、リベルテールサロンで韓国アナーキズム運動について話した。

国家 一 覚え書き・その2

氏族・部族・民族について

三 浦 精 一

国家といった大きな問題をとり上げたのは、実は前々号を反選挙特集号にするつもりだったのを、そのために書きはじめたのだが、ページ数の都合で出せなかったから、少し書き直して、「覚え書き」として勝手気儘に、まとまりのないままで、脱線もしつつ書き続けようというのである。問題は大きいし、生活に追われながら、やっとこのリベルテールを通じて御託をならべている老人の僕に、論文として練り上げ、まとめあげる余裕が、時間的にも、経済的にもないからでもある。

実は石川さんの古事記神話の新研究から始めて石川さんの歴史作品を批判する準備を始めた所だったから、これは道草で、僕に歴史の勉強をすすめて手ほどきしてくれた、いわば「胸をかしてくれた師匠」石川さんに対して申し訳ない道草とも思えるからでもある。

できるだけ展開の順序は考えて行くつもりだが、問題が大きいので、その周辺の思わぬところに飛んで行くこともあるかも知れない。いずれにせよ自由に筆をすすめて行こう。

されて区別されもしないといった状態である。

X

言語、民族の世界の分布図を開いて、その中に国境線がどのように設定されているか、国境は何故、誰によって設定されたかを考えるだけでも、この地上で、いかに無理が強行されているかが分るだろう。数百におよぶ言語があるとされるインドで、国家は二つか三つの標準語を強制しようとする。言語とともにつくり上げられた文化も、酷しいカースト制のもとに貧窮にあえぐ民衆の困苦もかえりみず原子力実験を強行した意図はいずれにあるか。シナもロシアも国民の生活を見捨て、ゴマカシながら原爆をつくり、フランスのデイスカールデスタンは原子核実験に反対する閣僚を追いついた。ポルトガルはいかに植民地を弾圧し続けたか。南阿で人種差別を強行するためには国家と憲法、法律、警察力は不可欠の道具である。ヴェトナムでの大量虐殺は何のためなのか、カライイ政権が必要なのは何か。ニクソンの盗聴事件は何のためだったか。それでもその地位は安泰である。各国の警察網やスパイ網を考えればこんなことが常習で当然ではないか。反対党が批判しても国民の良心をゴマカスためて決してCIAを否認しはしない。反対党も警察やCIA、国家を是認し、社会や民衆をしてその道徳

X

社会の成り立ちを、コミュニティ（共同体）とアソシエーション（結社）とに分けて考えたマッキンヴァーにしたがって、自然的なものとな人為的なものを区別し、この人為的なものに暴力を結合したものとして国家を把握するのが僕の考え方であることは、前号で大体分っていただけなことと思う。

クロボトキン主として近代国家に絞って国家を考察した。現在地上に存在するほとんどの国家は、ヨーロッパからの輸出品としての近代国家の概念に沿ってつくられたり変成したりしたものである。そして人々はこの国家の中で生れて育っているために、国家そのものが、その風土となり、家庭となっていて、たとえばどんな貧しい家でも最上の家庭として、それ自体がそのままであるかのように考えられ、それがいかにあるべきものであるか。いかに変革すべきものであるかなどと現状打破を考えることは、間違ったこと、恐ろしいことと思われる。国家の組織、会社、そして社会制度、すべてが現状のままで続けられねばならないとさえ考えられている。人間の社会は国家以前から存在し、現に人間の社会生活に国家の介入などは不要な面までも、どのよう

に歪められているかなど考えもせず、国家と社会が混同

を無視する。だからニクソンも法律によって決して投げ出したり辞任せず済むのだ。国民をエコノミック・アニマルに墮落させて経済大国ゾラを守ろうとする日本はどうだ。教育に国家が介入しようとするのは国民の奴隸化政策にすぎない。こうした国家悪こそ人間が自然に形成するコミュニティ、アソシエーション、さらに掘下げた人間自体から考えて行かねばならないものである。

X

人間のコミュニティは原初的には、共通の出自をたどる民族や部族によってつくられたものである。古代の日本人もウカラあるいはヤカラがムラ（群、村）やクニ（国、村落）をつくっていたことが知られている。ウカラ、ヤカラはハラ（腹、胞）としてウラル・アルタイ語に関連があるといわれている。共通の出自によるコミュニティをつくっていたのであろう。

共通の出自をたどる氏族（クラン）のうち三代か四代くらい前の近い祖先までをたどるものは特に密接でもあり、普通リーニジ（血統とか系統、系譜の意味をもつ「リーニジ」「リネージ」として一つの術語になっている）と呼ばれ、幾つかのリーニジが一つの部落をつくる。氏族（クラン）はさらに遠くまで祖先をたどり、同じ氏族のものは幾つかの部落に住んでいる。部族（トライブ）

となるとさらに広く分布している。

×

おそらく人類の最初の居住地と考えられているアフリカには、今もなお狩猟を主とする部族も残っており、農業や牧畜によって生活する部族もいると言われる。自然の条件に適応しながら数千年を食物採集段階のまま、あるいは生産段階に進んだいろいろな民族や部族が、交易したり、通婚したり、戦ったりしながら現在におよんでいる。中には数千年前に大国家を建設したエジプトのような国もある。このアフリカ大陸に入って行った白人がやって来たことは、アメリカでもそうだったが、罪悪史、あるいは残虐史と呼ばれている。奸知、武器、そして経済的搾取による植民地化。現在ではそうした悪虐の上に独立という名目で経済的に隷属させたままで、近代国家の体裁だけをつくらせている。こうした中にシェウィツァー博士のように、白人の罪悪の一端でも償いたいと、医療に献身した人もいる。

このアフリカは、しかし、人類学にとっても大きな宝庫である。そこには昔のままの生活を続けて国家を形成しないものもある。未開で国家がつかれないからではなく、無用な国家の形成を妨げるブレーキさえもっているのである。

リーニジ、氏族、部族といった出自をたどるにしても、そこには男系による出自をたどるものと、女系によるものがあり、一夫多妻もあれば一夫一婦によるものもある。

×

人類が狩猟時代から牧畜時代、それから農業時代に入ったという図式的な考え方はすでに現在では通用しなくなっていることは前号に書いたが、バホーヘンのひそみにならってモルガンは、乱婚時代、母権時代、父権時代そして一夫一婦婚時代という進化主義的な仮説を立てた。それをエンゲルスが採用したために、教条主義的なマルクス・エンゲルス信奉者たちは今でもそれを信奉している。こうしたモルガンの仮説を立証できるものは今にいたるまで何一つ見出されなかったし、今後とも絶対に見出される可能性はない。

群居動物である人間が単に本能によってのみ生きるものでない以上、理性的な判断、感情的な好悪、社会的な制約といったことが随伴するし、愛情自体が、偶発性とともに選択性も保守性も秘密性も持っているのである。乱婚時代があったと聞いて喜ぶのは欲求不満のコンプレックスによるものであろう。

人間の進化には、また人間のつくる社会形態の変遷や多様性には、人間のもつ保守性が大きな役割をはたして

いることを考えねばならない。あるコミュニティでの、ある時の、ある偶発的なものでさえ、時として保守されてその集団の特徴的な一つのものになることさえもあるのである。一夫多妻制にしても、一妻多夫制にしても、それが守られ受継がれて行くためには、社会的な条件とルールがある。条件が変化すれば、どんなに頑強に保守しようとしても結局崩壊せざるを得ない。われわれにとって革命ということは、こうした社会的条件を準備し、積み上げて変化させるといふ意味も持っている。政権の獲得は一夜で出来る賭博的要素を多分に持ったものだ。毛沢東が政権の座にすわった後までも文化大革命を呼号しているのは、社会革命が必要だということだ。革命はまだまだ遠いということだ。シナの民衆の憎悪する権力者となった彼に真実の革命は遂行できはしない。やがて追放した「陸一派」を復権して官僚政治の基礎をかためて死ぬのがせいぜいだろう。

×

リーニジは近い祖先からの出自集団であるといったが、家族という考え方がわれわれとは同じではなく、一夫多妻制をとっている場合、家族も大きいし、リーニジも相当大きな集団となる。われわれの家族はせいぜい祖父母、両親、子供たちといった構成で、オジヤオバはすでに親

類と考えられる。そして結婚して両親とはなれる最近の習慣では両親と子供たちだけが家族として核家族と呼ばれている。飛弾の高山に残る大きな家はもう昔の記念物になっている。しかしアフリカ人にとって父の兄弟は子供にとって同じ父の名で呼ばれ、母の姉妹は同じく母と呼ばれる。父の姉妹は男の母、母の兄弟は女の父と呼ばれる。そして父系部族では継承はこのオジである父からであり、母系部族ではオバである母からである。そしてこのクランは同じクランに属する者同志の婚姻を禁じられているために、別のクランのリーニジを含めて一つの部族が形成される。

部族として狩猟に従事するもの、牧畜や農耕に従事するものなどがあり、同系の部族であっても一方は狩猟に従事し、他方は農耕をしているというものもある。このような場合地理的には同じ地域に住んでいなくても同じ民族に属する部族と呼ばれる。だから民族という場合は生業や分布は異っていても、人種的言語的な共通性に基づいて民族と呼ばれるのである。

しかし、一般的意味での民族は、地理的、歴史的、政治的なものに人種的な概念も加わって交錯したものになっている。日本民族というのがそうだ。この極東の孤立的だった島の中で、大陸や海洋をこえて渡来した部族や

民族や、家族あるいは個人などが住みついて長い年月の間に一つに醸成されて、共通の言語、共通の意識をもつていたたものと思われる。支配者となった天孫族によって、神話が編集されて古事記や日本書紀となり、一元的な支配が推進された。こうして出来上っているのが日本民族という概念である。しかし民族としてはもと多民族であったと言わねばならないだろう。基幹となった民族があったと考えられるが、こうしたことは民族学による発掘がさらに進むのを待たねば、今のところ何も言うことはできない。

今一つ、ヒットラーが血の純血を強調してユダヤ人を迫害し、虐殺したドイツ民族がある。ノールウエー人、スエーデン人、デンマーク人、オランダ人などと同じゲルマン民族の一派である。ドイツ帝国として、ビスマルクの時代に統一が完成されて以後、一つのドイツ民族としての意識が成立したのである。

どの民族でも長い歴史の間に他の民族と混血していつて決して純粋とか純血とは言えないものになっているのが事実で、比較的純粋といわれるユダヤ人ですら旧約聖書を通じて知り得る限りでも、決して純粋ではない。ヒットラーにもユダヤ人の血が混っていないという証拠もありはしない。政治的統一のために国家の権力者はいつも

この民族の純粋などという用語をつかう。そして歴史をその時の権力者に都合の良いように書かせる。古事記や日本書紀がつくられたのもそのためだった、一番近い例はロシアでレーニン、スターリン、フルシチョフ、ブレジネフとその権力者の意図を反映するように、いつも歴史は書きかえられた。日本でも国家が教育に干渉するのはこのためである。こうした国家の暴力を排除することが真の学問の道である。

民族は単に種族的、血縁的なものとしてだけでなく、社会的、歴史的、地理的な過程で積上げられたその文化をもつものとして考えられねばならない。

X

コミュニティーはアフリカでも主として家族、リーニジ、クランによってつくられている。クランが大きくて広い地域に分散している場合もあり、部族となればさらに広い分布をもっている。こうした地縁的な分布をもちながら、同じ祖先につながる神話に結ばれて一つの運命的な共同体となる。

すべてが初めから血縁的な結合でなく、たとえば鍛冶屋などのように、または親たちの反対を押し切って結婚してコミュニティーの規制を破った者たちで流入を容認された者なども含まれる。しかしそこに住む内にいつか

共通の出自を物語る神話も創作されて、いつか名実ともにコミュニティーの一員となる。

X

アフリカやオーストラリアの諸部族の間に外婚制が行われている。外婚制は族外婚制とも言われ族内婚に対するものである。

性の結びつきということは生物としての事実であるが、結婚ということは人間の社会でつくり上げられたもので、家族といい、親族というのも人間の社会的概念である。構造的なこうした社会的概念を、生物的概念に還元したり、おきかえたりしようとする者もいるが、若さや無知からの論理的飛躍によってのみ可能なことである。結婚ということには単なる個人の性的結合というだけのことではなく家族、そして民族の全集団間の関係がふくまれている。

レヴィ・ストロースは「全人類にとって家族発生に絶対必要な条件とは、まず二つの家族が存在し、一方が男を、他方が女を供給して結婚が成立し、ここに第三の家族生活が始まる。こうしてこの過程が無限に繰返されていくという単純な事実が基礎となるのである。別の表現をすれば他の動物と人類とを区別するものとして、人類においては社会なくしては一つの家族も存在しない」と

言っている。こうした家族という概念にもとづく結婚に関連して、近親婚のタブーが生ずる。これはレヴィ・ストロースが「かりそめに社会組織の起原があったとすれば、それは近親相姦の禁忌によってのみ可能だということを強調したい」といっているように、彼は近親相姦に関して、それが生物学的に危険な訳でもなく、動物の品種改良などではむしろ最良の方法でもある事実を認め、また権力者階級においては従来しばしば行われもしたことも認めて「近親結婚が危険なのは近親相姦の禁忌があるから危険なのだ」と言っている。結婚が近親間でなく他の家族との間に行われることによって二つの家族、二つの集団の結合、相互扶助の体制を成立させるからである。

こうした近親婚のタブーをめぐって族外婚が考えられる。どの範囲までが近親であるかという問題である。これに対する考え方は各民族とも決して一様ではない。アフリカやオーストラリアなどで行われている族外婚を一つの模式的なものとしてあげて見よう。

まずイトコと呼ばれる血族が、二つに分けられる。パラル・カズン（平行イトコ）とクロス・カズン（交叉イトコ）である。父母は当然族外婚によるもので、自分は男であるとして、自分が結婚できるのは交叉イトコで

